

〔一〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

〔注¹〕『批評と臨床』では、「健康 (santé)」が重要視されています。しかしこのことは、ドゥルーズがもはや狂気を考慮しなくなったことを意味するわけではありません。実際、『批評と臨床』の冒頭を飾る「文学と生」の中心的なテーゼは、次のように、文学と狂気を関連づけるものです。

文学は狂気 (délire) である。だが、狂気は父―母にかかわる事態ではない。

だとすれば私たちは、ドゥルーズを導いたキャロルの狂気とは、まさに「父―母にかかわる事態ではない」ような狂気であったと考えねばならないでしょう。

ところで、この「狂気は父―母にかかわる事態ではない」という言明は何を意味しているのでしょうか？ 「創造と狂気」をめぐる言説の歴史を追ってきた私たちにとって、これをプラトンの神^{〔注3〕}的狂気、あるいはハイデガーの「詩の否定神学」を構造論化したラカンの精神病論における〈父の名〉の排除、といった考えに対する批判として考えることはたやすいと思います。要するに、ドゥルーズがここで行おうとしているのは、病跡学的思考のパラダイム^{〔注5〕}の転倒^{〔注4〕}にはかならないのです。

実際、病跡学的思考のパラダイムは、プラトンの神^{〔注3〕}的狂気論から、一九世紀以降の「詩の否定神学」の伝統^{〔注4〕}に基づく統合失調症論に至るまで、父^{〔注5〕}・神^{〔注3〕}の言葉を肯定的／否定的な形で伝達することが優れた文学的創造の条件であると考えていた、と整理することができます。そして『批評と臨床』は、まさにこのようなプラトン主義的／ハイデガー主義的な「創造と狂気」論を転倒することを企てているのです。すなわち、かつて優れた詩を生み出すとされた神^{〔注3〕}的狂気は現代では価値を失っており、これまで価値が低いものとされてきた人間的な狂気こそが優れた文学的創造を可能にするのだ、とドゥルーズは主張するのです。彼の言葉に注釈を挟みながら読んでみましょう。

文学は狂気である。だが、狂気は父―母にかかわる事態（「神**的**狂気」）ではない。（…）文学とは狂気である。そしてこの資格において、それはみずからの運命を狂気の二つの極（「神**的**狂気と人間的な狂気」）のあいだに賭ける。狂気は一つの病いであり、（父**＝**神の言葉を伝達しているという点で自分が）純粹で優勢（な狂気）だと称する人種（「神**的**狂気」）を狂気が打ち建てたたびに、すぐれて病いであるものとなる。しかし、あの抑圧された私生児的「雜種的人種（「人間的な狂気」）、さまざまな支配の下にあつて絶えず動き回り、押し潰し監禁しにかかるあらゆるものに抵抗し、プロセスとしての文学の中にみずからの姿を白抜きに描き出すあの私生児的「雜種的人種の力に訴えるとき、狂気は健康の尺度となるのだ。（…）文学の最終的な目的——狂気の中からこうした健康の創造を、あるいは（…）生の可能性を、解き放つこと。

ドゥルーズは、父**＝**神の言葉を（肯定的な形で）伝達している文学——すなわち、神**的**狂気によって書かれた文学——は、そうジショウ^イしているにすぎない、と述べています。さらに、父**＝**神に由来する己の純粹性を主張し、他の文学を低俗なものとして切り捨てるその身振りは、人種主義（人種差別）的であり、ファシズム的ですからあるという主張もなされています。この批判は、第一義的には神**的**狂気によって書かれた文学を称揚するプラトン主義に向けられています。が、「詩の否定神学」以後のパラダイムに属するハイデガーやラカンにも向けられていると考えられます。というのも、父**＝**神の言葉を（否定的な形で）伝達しているとジショウする文学は、その患者の精神が耐え難いほどの不可逆的なダメージを負うこととひきかえに生み出されるとされますが、ドゥルーズはそのような悲劇主義的な考え方に対して「狂気が臨**床**的状態に陥ってしまったら、言葉はもはや何ものにも到達することはないし、人はもはや言葉を通して何一つ聴くことも見ることもない」という手厳しい批判を向けているからです。「詩の否定神学」が称揚する統合失調症は、一瞬の創造性のきらめきとひきかえに、以後の人生を台無しにしてしまうおそれがあるのです。

ドゥルーズにとって、父**＝**神の言葉を肯定的に伝達する（とジショウする）神**的**狂気や、否定的に伝達する（とジショウする）「詩の否定神学」は、前者は人種主義的・ファシズム的であるがゆえに、後者はそれがもつ悲劇的性質（病とひきかえ

に創造性が獲得されるという考え^ウゆえに、否定されなければならないものとなります。そして彼は、父⇨神にかかずらわらない文学、すなわち「健康としての狂気」によって生み出された文学にこそ高い価値を与えようとするのです。そのような文学は、もはや正嫡的な父⇨神の言葉とは、肯定／否定のどちらの形でもかかわることがありません。それは、父⇨神の言葉に関して記憶喪失に陥った私生児的⇨雑種的な文学であり、「さまざまな支配の下にあって絶えず動き回る」ような文学だとされます。

では、「健康としての狂気」が生み出す文学とは、具体的にはどのようなものなのでしょうか？

ドウルーズは、『意味の論理学』から『批評と臨床』に至る過程で、アルトーの「深い」文学よりも、キャロルの「浅い」文学を偏愛^ロするようになりました。それは、私たちの言葉でいえば、神的狂気の文学に否定神学的なひねりを加えた統合失調症的な文学よりも、父⇨神にかかずらわらない文学を評価するようになったということにほかなりません。アルトーは、キャロルの「ジャバウォッキ^{注7}」に不満をもらす手紙の中で、「私はケツジ^{注8}の腐臭を放っている詩を好むのであって、入念に準備された食事は好きではない」と述べていますが、統合失調症的な「狂気」の文学はまさに「(父⇨神の)ケツジ」の腐臭を漂わせる文学であり、反対にキャロルの「表面」の文学はそのような腐臭を一切もたない文学なのです。

実際、『批評と臨床』において表面の文学の代表例として高い評価を与えられているのは、キャロルであり、さらにはレーモン・ルーセル（一八七七一—一九三三年）やルイス・ウルフソン（一九三一年生）といった作家の作品です。これらの作家は、後述するように、いずれもアスペルガー症候群（自閉症スペクトラム）の特徴をもっています。しかしドウルーズは、これらの作家の「狂気」を、そのような新しい疾患概念——アスペルガー症候群の発見は一九八一年、アスペルガー症候群を自閉症とのスペクトラムとして捉える「自閉症スペクトラム」という考え方の登場は一九九五年であり、おそらくドウルーズはこれらの概念を知り得なかったと考えられます——に則^{注9}って評価しているではありません。むしろ彼は、ナンセンズな言葉遊び（キャロルの「カバン語」）や、同音異義語に依拠する形式をもとにした物語の展開（ルーセルの「手法（procédé）」、母国語を避けるために複数の既存の外国語を駆使して新しい言語を生み出そうとする努力（ウルフソンの

「母親の声（母国語）に対する戦い」といった、これらの作家に共通してみられる特徴、すなわち言語の表面的使用こそを評価しているのです。そして、言語を深層^Eではなく表面において扱う彼らの言語使用こそが「健康としての狂気」が生み出した創造であると主張するのです。

キャロル、ルーセル、ウルフソンという三人の作家は、いずれも自らの外部から到来する父Ⅱ神の言葉に（肯定的／否定的な形で）依拠することはありませんでした。その代わり、彼らは「言語の内部で一種の外国語を形成する」ようにして書きました。すなわち彼らは、すでにある既存のボンヨウ^オな言語を父Ⅱ神の言葉の力を借りて外側から解体しようとするのではなく、むしろ既存の言語をその内側からハッキングすることによって転覆させようとしたのです。そして、このような言語のハッキング、すなわち「言語をその慣習的な轍^{わだち}の外へ引きずり出す」ことこそが、現代において「言語を狂気させる（delirer）」ことにはかならない、とドゥルーズは宣言しています。

しかし、ここで注意しておかなければならないのは、『批評と臨床』のドゥルーズが称揚する言語の内側からのハッキング、すなわち「健康としての狂気」が生み出す文学は、父Ⅱ神の言語と一切関係がなくなってしまったわけではないということです。次の決定的な一節を確認しておきましょう。

ある手法^いを作動させるのは精神病の役割であり、その手法^いとは、通常の言語、標準的な言語を取り扱い、それを未知の独創的な言語に「する」ようにすることだ。その独創的な言語は、神の言語の投影でもありうる（peut-être）し、すべての言語活動を連れ去るのである。この種の手法は、フランスにおいてはルーセルやプリセに見られ、アメリカではウルフソンに見られる。

キャロル、ルーセル、ウルフソンらの文学は、たしかに父Ⅱ神の言葉に依拠してはいません。彼らは、むしろ言語をその内側からハッキングすることによって文学創造を行っています。しかし、そのような言語の表面における組み換えは、逆説的にも、結果として「神の言語の投影」としての性格をもつことがありうる（あるかもしれない）。ドゥルーズはそう主張

しているのです。『批評と臨床』のドゥルーズは、文学の創造にとって狂気を重要でないものとみなすようになったわけでもなければ、「ある手法を作動させるのは精神病の役割である」、さらには文学が父Ⅱ神の言語と無関係だと考えるようになったわけでもありません。「独創的な言語は、神の言語の投影でもありうる」。ドゥルーズが棄却したのは、文学の創造を、神的狂気のような外部の超越的審級の作用に特権的に還元する統合失調症中心主義的な考えであり、さらには、神の言語を外部の超越的審級から直接獲得できるとする正嫡主義的な考えだったのです。

現代文学における形式的（表面的）な実験は、もはや超越的な審級（父Ⅱ神の言葉の吹き込みや、その否定神学的なヴァリエーション）が機能しなくなったとき、どのようにして文学を創造するのかという切実な問いに答えようとするものだったのかもしれませんが。かつては超越的な審級が機能し、その強力な侵入性によって新たな文学の言語が生み出されていたのだとすれば、超越的な審級が機能しない現代においては、むしろ言語の経験的な水準に徹底的に内在し、経験的な言語を内側から組み換えることによって変容させるしかありません。そして、そのような言語の内側からのハッキングによって、新たな超越性が発生する可能性に賭けるほかないようにも思えます。ドゥルーズにとって、キャロルらの表面の文学は、言語を内側からハッキングした結果として生み出された言葉が父Ⅱ神の言葉の投影になるかもしれないことに賭ける、投瓶通信のような偶然性に開かれた確率論的な文学だったのです。

それは、文学をデータベースや、それを制御するコンピュータのアルゴリズムで置き換えることにも、どこか似ています。これまでに書かれたすべての文学作品をあつめたデータベースや、あらゆる時間と場所で作られたすべての会話のデータベースを用いて、それらのデータを組み換えることによって偶然に生み出された文学……。そのようなものからは創造が生まれることはないと考えられるかもしれませんが。しかし、だからといって、現代の作家はもはや父Ⅱ神の言葉の吹き込み（プラトン）や、不在の神（表象不可能なもの）のコンセンキに頼ること（ヘルダーリン）はできません。ならば、すでに与えられたデータを収集し、組み換えながら、その処理結果が偶然にも「あたり」である可能性に賭けるというのは、それは

どトツピな戦略ではないはず。実際、浅田彰が横尾忠則のコーラージュ作品から抽出した特徴は、まさにインターネットや検索エンジンが可能にするデータベースにも似た「表面」の技法でした。

「…」と「自己」と言っても、小さく閉じた「私」が幼年期のトラウマから来る無意識のわだかまりを表出するなんていうチンケな話ではない。横尾さんの場合、無意識の底が抜けていて、古今東西ありとあらゆる情報と映像の奔流がそこから入ってきては変形されて出ていく、そういう変換装置になってるんじゃないか。〔…〕

印象深いのは、横尾さんがアメリカでコーラージュ作品の個展を開催されたときのこと。アメリカ人から「あなたはなぜ戦争とセックスと宗教ばかり表現するのか」と聞かれた横尾さんは、「戦争とセックスと宗教に取りつかれているのはよくじゃなくあなたの方アメリカ人であって、よくはそのオブセクションをサンプリングしリミックスしているだけだ」と答えられた。〔…〕

それは日本の文化や風土を素材にしたときも同じじゃないでしょうか。それらは自己の内にあるノスタルジックな原点ではなくて、アメリカ文化と同様のデータに過ぎない、それを変形して出力しているだけだ、と。

ニーチェの言うように、表面ほど深いものはない。逆にいえば、深いとされている自分の無意識など、何程のものでもない。

アルトー的な深層や、無意識の深層などにはもはや価値はなく、むしろ、表面ほど深いものはない。このような文脈のなかで考えるなら、東浩紀（一九七一年生）の一連の仕事は、現代における創造をデータベースをモデルにして考えようとするものだといえるでしょう。彼は、二〇〇一年の『動物化するポストモダン』において、現代の作品がデータベースに蓄積された「萌え要素」すなわちフェティッシュの順列組み合わせによって作られていることを指摘しています。さらに、二〇一四年の『弱いつながり』では、インターネット文化が全面化することによって、かつての「表象不可能なもの」が廃棄

されてしまったと指摘しています。すなわち、「結局はネットは人間が作った記号だけでできている。ネットには、そこにだれかがアップロードしようと思ったもの以外は転がっていない。」「表象不可能なもの」はそこには入らない」というのです。このことは、私たちの文脈でいえば、現代では、父神の言葉は直接的な吹き込みとしても、否定神学的なコンセキとしても現れることがないということを意味しています。

東は、このような現代においては、「新しい検索ワード」を手に入れることこそが重要だと主張します。私たちは、「Google」のような検索エンジンに様々なキーワードを入力することによって、サーバーに保存されているデータベース（ドゥルーズ的な出来事＝情報の総体）をそのつど別の視点で切り取り、別の仕方で並べ替えた結果を次々と表示させることができます。ならば、これまで知らなかったような新しい検索ワードを用いることは、まったく新しい世界を出現させる可能性を手に入れることとはほぼ同義になるはずです。このような世界観においては、新しい検索ワードを手に入れることは新しい世界に出会う確率を増やすことにほかならないのです。

このようなデータベース的表面に依拠する世界観は、もはやヘルダーリンやアルトーのような統合失調症的な狂気を必要としていないかのようです。そして、この世界観は、キャロル、ルーセル、ウルフソンといった別種の「狂気」——自閉症スペクトラム（アスペルガー症候群）というポスト「統合失調症」的な狂気——と何らかの関係をもっているように思えます。

（松本卓也『創造と狂気の歴史』より）

（注1）『批評と臨床』—— フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ（1925～95）の著書。

（注2）キャロル—— イギリスの数学者・写真家・作家ルイス・キャロル（1832～98）。

（注3）プラトン—— 古代ギリシャの哲学者プラトン（BC 427～347）。

（注4）ハイデガー—— ドイツの哲学者マルティン・ハイデガー（1889～1976）。

（注5）ラカン—— フランスの哲学者・精神分析家ジャック・ラカン（1901～81）。

- (注6) アルトー — フランスの俳優・詩人アントナン・アルトー（1896～1948）。
- (注7) ジャバウォッキー — ルイス・キャロルの児童文学『鏡の国のアリス』で記述されたナンセンス詩。
- (注8) ヘルダーリン — ドイツの詩人・思想家フリードリヒ・ヘルダーリン（1748～1828）。
- (注9) 浅田彰 — 日本の批評家（1957～）。
- (注10) 横尾忠則 — 日本の美術家・グラフィックデザイナー（1936～）。
- (注11) 東浩紀 — 日本の批評家・哲学者（1971～）。

問一

「病跡学的思考のパラダイムの転倒」とあるが、「病跡学的思考のパラダイム」はなぜ問題なのか、その理由の説
明として**正しくないもの**を次の中から一つ選べ。

1

- 1 父Ⅱ神の言葉を否定的狂気を通じて伝達することが優れた文学的創造の条件であるという考え方では、病とひきかえに創造性が獲得されることになるから。
- 2 「詩の否定神学」的な考え方では、その患者の精神が耐え難いほどの不可逆的なダメージを負うこととひきかえに文学が生み出されることになるから。
- 3 父Ⅱ神の言葉を伝達しているという点で自分が純粹で優勢な狂気だと考えているところが、人種主義的でファシズム的であるから。
- 4 父Ⅱ神に由来する己の純粹性を主張し、他の文学を低俗なものとして切り捨てる点で、人種主義的でファシズム的であるから。
- 5 文学の創造を否定的狂気に特権的に還元してしまうと、一瞬の創造性のきらめきという肯定的な狂気を台無しにしてしまうおそれがあるから。
- 6 神の言語を外部の超越的審級から直接獲得できるとする考え方では、狂気が臨床的状态に陥ってしまうと、人はもはや言葉を通して文学を生み出すこともできなくなるから。

問二

「ジシヨウ」「ケツジヨ」「ボンヨウ」「コンセキ」「トツピ」の漢字と、同じ漢字を含むものを、次の中から一つ選べ。

2
(6

イ 1 案をテイシヨウする 2 シヨウカンされる 3 シヨウシンする

4 メイシヨウをつける 5 シヨウケイをいだく 6 比較タイシヨウする

エ 1 ジュンジヨが違う 2 道路をジヨコウする 3 客観的ジヨジュツ

4 ジヨリヨクを惜しまない 5 トツジヨ動き出す 6 ジヨナンの相が出ている

オ 1 空は雨モヨウ 2 ヨウチな考え 3 ヨウト別に分類

4 ヨウテンをまとめる 5 ケイヨウしがたい色 6 チュウヨウの美德

キ 1 コンメイの時代 2 コンキが必要 3 ケツコンが残っている

4 コンタンは明らか 5 カイコンされた土地 6 コンセツ丁寧な説明

ク 1 ハツピを着る 2 ヒガンの入り 3 技をヒロウする

4 ヒクツな態度 5 世界へユウヒする 6 モンピの開閉

問三

「挟^Aみ」の「挟」の字が使われる語として、適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

7

1 挟撃 2 挟量 3 広挟 4 偏挟 5 挟谷 6 海挟

問四

「称^B揚」に最も近い意味の語として、適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

8

1 抑揚 2 詐称 3 賛美 4 浮揚 5 呼称 6 美化

問五

「健康としての狂気」によって生み出された文学」の説明として、正しくないものを次の中から一つ選べ。

9

- 1 正嫡的な言葉とは肯定／否定のどちらの形でもかわることのない、雑種的な文学。
- 2 父Ⅱ神に由来する腐臭を漂わせる文学ではなく、そのような腐臭を一切もたない「表面」の文学。
- 3 キャロル、ルーセル、ウルフソンなどに共通する特徴をもっている作家の文学。
- 4 既存の言語を父Ⅱ神の言葉の力を借りて解体し変容させようとする文学。
- 5 文学の創造を超越的審級の作用に特権的に還元しないような文学。
- 6 言語の経験的な水準に徹底的に内在し、言語を内側から組み換え変容させる文学。

問六

「偏愛」の「偏」を用いた語として、正しくないものを次の中から一つ選べ。

10

- 1 偏歴
- 2 偏見
- 3 偏食
- 4 偏向
- 5 偏屈
- 6 偏重

問七

「則つて」の「則」を用いた四字熟語として、適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

11

- 1 則身成仏
- 2 則断則決
- 3 則先垂範
- 4 則製乱造
- 5 則天去私
- 6 相則不離

問八

「深層」の反対を意味する語として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

12

- 1 薄層
- 2 高層
- 3 断層
- 4 地層
- 5 低層
- 6 表層

問九

「現代文学における形式的（表面的）な実験」の説明として、**正しくないもの**を次の中から一つ選べ。

13

- 1 ナンセンスな言葉遊びや、同音異義語に依拠する形式をもとにした物語展開、複数の外国語を駆使して新しい言語を生み出そうとする努力などの、言語の表面的使用。
- 2 外部から到来する父・神の言葉に依拠することなく、既存の言語を内側からハッキングすることで転覆させようとする試み。

- 3 経験的な言語を内側から組み換えることによって変容させ、新たな超越性が発生する可能性に賭けるという、偶然性に開かれた創作活動。

- 4 Googleのような検索エンジンに様々なキーワードを入力することによって、既に与えられたデータを収集し、組み換えてみることに。

- 5 そこにだれかがアップロードしようと思ったもの以外は転がっていないネットで、かつての「表象不可能なもの」を探す試み。

- 6 統合失調症的な狂気ではなく、キャロル、ルーセル、ウルフソンといった自閉症スペクトラム（アスペルガー症候群）と関連した世界観に基づく創作活動。

問十

「奔流」の「奔」を用いた四字熟語として、**適当と思われるものを次の中から一つ選べ。**

14

- 1 興味奔位
- 2 自由奔放
- 3 帰巢奔能
- 4 奔末転倒
- 5 他力奔願
- 6 一奔調子

問十一 本文の文脈の中で「オブセツション」^Gにあてはまらないものを次の中から一つ選べ。

15

- 1 父と神の言葉のような超越的な審級
- 2 幼年期のトラウマから来る無意識のわだかまり
- 3 アメリカ人にとっての戦争とセックスと宗教
- 4 自己の内にあるノスタルジックな原点としての日本文化や風土
- 5 深いとされている自分の無意識
- 6 データベースに蓄積された「萌え要素」

問十二 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

16

16

の欄に、二か所マークすること

1 ドゥルーズの評価する文学は、プラトン主義的な神的狂気の文学にハイデガー主義的な否定神学的なひねりを加えた統合失調症的な文学から、父Ⅱ神にかかずらわらない文学すなわち「健康としての狂気」によって生み出された文学へと、変化してきた。

2 インターネットが全面化した現代社会においては、サーバーに保存されているデータベースを新しい検索ワードによって様々な角度から切り取ることが、アスペルガー症候群の治療にも役立つと考えられるため、それが現代文学の主題にもなってきた。

3 言語の内側からのハッキングとは、言語の経験的な水準に徹底的に内在し、経験的な言語を内側から組み換えることによって変容させることであり、ドゥルーズにとっては横尾忠則のカラージュ作品の特徴もまさに言語を内側からハッキングした結果として発生した新たな超越性といえるものだった。

4 ドゥルーズが高く評価する「健康としての狂気」が生み出す文学は、父Ⅱ神の言語と関係がなくなってしまうたわけではなく、ナンセンスな言葉遊びなど言語の内側からのハッキングによって文学創造を行うことで必ず神の言語の投影としての性格をもつことになる。

5 キャロル、ルーセル、ウルフソンの作品に対してドゥルーズが高い評価を与えるのは、複数の外国語を駆使して新しい言語を生み出そうとする努力など、それらの作家に共通してみられる特徴が「自閉症スペクトラム」という新しい疾患概念にあてはまることを知っていたからである。

6 ドゥルーズが「健康」を重視したのは、文学が統合失調症的な狂気と結びつくのを批判するためであり、アスペルガー症候群的な狂気の可能性を排除したわけではない。アスペルガー症候群的な作家たちの文学は、既成の言語の内側での様々な試みを通じて新しい世界観につながるものである。

「二」 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

私が専門とする「美学」^アは、多くの方にとって、あまり聞き慣れない学問かもしれません。私はよく「美学は哲学の兄弟」と説明しているのですが、美学は哲学と同じように言葉を使い、じつくりと考えながら分析する学問です。ただ、哲学が「存在とは」「時間とは」などと、言語化された概念に向かって分析を進めていくのに対し、美学の場合は「そんなにすべてを言語化することはできないよね」というところから出発します。つまり、ロゴスの力を借りながらも、ロゴスを絶対視しないのです。

たとえば、芸術作品を見たときに受けるシヨウゲキ^イや、私たちの感性、あるいは身体感覚といったものは、あいまいで捉え難く、簡単に言葉にすることはできません。でも確かに私たちはそれを感じているし、それによって世界の見え方が一変するほどのシヨウゲキを受けたりもします。そうした人間の「曰く^{いわ}言い難い感覚」について、あえて言葉を使いながら深めていく、それが美学という学問分野になります。つまり、美学はロゴスに対する警戒心^アを持つ学問なんです。

私自身、言葉に対してはアイゾウ^ウ相半ばする思いを持っていました。というのは、子どもの頃から吃音^{きつおん}があるので、言葉に対して常に距離があつたんです。言葉がなかなか自分とフィットしない感じ。でもだからこそ「言葉って何だろう」と考える機会も多かったんです。そんな経験が、私を美学へと導いてくれたと思っています。

そんな美学という学問の中で、私は特に人間の体に興味を持って研究をしています。

理系でも文系でも、人間の体は、非常に抽象化された「体一般」として論じられてきました。けれども、現実の体は、一人ひとり条件が違います。性別、身長、体重はもちろん、持っている体質や病氣、障害の有無もそれぞれです。そうした現実の体の差をきちんと踏まえた上で体の研究をしたいと考えています。

具体的には、視覚障害の方や吃音の方、手足を切断された方のお話を聞きながら、そういう方たちがどのように体を使っているのか、そして、その体だからこそ見えてくる世界とはどのようなものか、あるいはどのような体の感覚でいるのかといったことを調査、研究しています。目が見える人に見えている世界は、視覚がないとまったく違って見えてきた

りするわけですが、そんなふうに体の多様性を踏まえていくことは、この世界の別の形や姿を見つけていく作業だと感じます。

こういう違いは、細胞レベルでもあるようですね。最近、島袋勝弥^{しまぐさかつや}さんという弱視の生物学者と話す機会がありました。彼は限られた視野しか持っていないのですが、研究ではずっと顕微鏡を使うことにこだわっています。その理由を彼に聞いたら「平均の世界から逃れることができるから」と教えてくれました。

データにすると平均化されてしまう細胞も、顕微鏡で見ると一つひとつ個性があつて違っていることが分かる。同じ環境でバイヨウ^エしているのに、「なんかこいつ速いな」とか、「なんでこいつこんな形をしてるんだろう」とか差が出てくるのだそうです。

驚くべきことに、こうした個体差は、たんぱく質レベルでも見られるそうです。島袋さんは「生命の複雑さといい加減さが顕微鏡だと見える」と、教えてくれました。

新型コロナウイルスの感染が拡大し、日本で初めて緊急事態宣言が出されたのは、二〇二〇年四月七日でした。私は、あの日の夜空が忘れられません。ちょうどスーパームーンと呼ばれる満月が近く、大きな月に地球の混乱^Bぶりが見透^Cかされているような怖さを感じました。月から見れば、地球はとつくに緊急事態^Dだったと言えるかもしれません。

コロナのパンデミックが始まったとき、私は自分が信じていたものが根本から覆^Cされるような感覚に陥^Dってしまい、それをどう捉えたらいいのかということを言語化するのにとっても時間がかかりました。特に緊急事態宣言が出された時期は非常にナーバスになって性格も変わり、攻撃的になっていたところもあったと思います。

そんなときに、全盲の友だちが「みんなでZoomで集まろう」という連絡をくれました。そこで、全盲の人や難病を持っている人など、数人の知り合いに声を掛けてZoom飲みをしたのです。いざオンラインで顔を合わせてみたら、ピリピリしていたのは私だけで、障害や病気を持った彼らは皆^E、どっしり構えていて、あまり動じていなかったのです。もちろん、感染のリスクがあったり、外出が今まで以上に困難になったり、問題はたくさんあるのですが、そういうことは別に、と

でも堂々として見えました。

そんな彼らがカイ^オコウ一番、口にしたのは「みんな障害者^カになったね」という話でした。つまり、自分のせいではなく、環境が原因で自分の自由が奪われるという経験を今、みんながしている、それが「みんな障害者になった」という言葉として出てきたわけです。

コロナ禍^Fで、私たちはいろいろなことが自分の思い通りにできないという日々を送っているわけですが、そもそも、私たちの体は人間であると同時に思い通りにならない自然、ピュシスでもあります。人間として体を持っている限り、私たちは偶然^G、いろいろな障害や病気を抱える可能性を秘めています。そもそも、私たちが生まれて、死んでいくということ自体、自分で選んだことではなく、与えられたものです。体は、私たちに与えられた自然そのものだと言えるでしょう。

障害を持つている人たちは、そうしたコントロールのできなさを日常的に意識せざるを得ない状態におかれていると言えます。そして、そうであるがゆえに、思い通りにならないことに対してどう付き合えばいいかという経験値がとても高いのだと思います。私の中の人間の部分はなんとか自分でコントロールできるけれども、自然の部分、たとえば体のどこが痛いというとき、私は自分の中に自分でないものを抱えてしまっていることになる。そんな「ままならなさ」に日々向き合っている人たちが語る言葉は、やはりとても地に足が着いていて、そこには彼らが何年何十年もかけて手にした知や実感がつまっていました。彼らと話すことで私はものすごくほっとしました。彼らとのZoom飲みは今でも定期的に開催されていて、さまざまな活動が生まれる場になっています。

振り返って私自身のことを考えてみると、「人をコントロールしてはいけない」などと言いながら、実は自分や周囲の人々をコントロールすることが少なくなかったのだと気づきました。だから、思い通りにならないということに対して、必要以上にアワ^キてしまったのだと思います。

小説家の吉村萬壺^{よしむらまんいち}さん、文化人類学者の奥野克巳^{おくのかつみ}さんとのリレーエッセイ『びび割れた日常』にも書いたのですが、コロナ禍で自宅にこもり、オンラインで遠隔授業や会議をする生活を送りながら、なぜか植物に目がいくようになりました。私

の家の前にある小さな公園の木々や草花をぼーっと見たり、そうした植物が少し大きくなるだけでものすごく感動したりしていたのですが、これは私だけではなく、ネットの投稿などでも、コロナ禍がきっかけで植物に興味を持ったという人が少なかつたように思います。

植物のことなんて今まで考えたこともなかったのに、と不思議に思い、私なりに考えてみて思い出したのは、以前お会いしたレビー小体型認知症の樋口直美さんひぐちなおみのお話でした。そのときのキーワードとなったのは「足し算の時間と引き算の時間」という言葉です。「引き算の時間」とは、たとえば料理をするときに三品同時につくるとして、でき上がる時間を一二時に設定したら、そのために何分前にどういう作業をするかと段取りをつけるようなことです。料理に限らず、そんなふう

にゴールを見据え、そこから逆算して今しなければならぬことをするという時間の引き算を、私たちは日常生活の中でごく当たり前のこととして行っています。「三日後に発表しなければならぬから、今日はこの作業をやらなければいけない」「一〇日後に重要なミーティングがあるから準備を何日前から始める」、あるいは「三時に待ち合わせだから何時に家を出る」など、私たちはいつも時間を引き算し、現在よりも何時間後、何日後に意識を向けているのです。

けれども、スケジューリングしていた予定がコロナ禍ですべて真っ白になってしまったとき、私たちはそれまで普通に行っていた時間の引き算ができなくなってしまいました。

その最たるものは、二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピックでしょう。このオリンピック・パラリンピックのために、私が勤める大学も授業時間を一〇〇分に延ばすなど、授業の仕組みを変えましたし、日本国内はもちろん、世界中の人々がオリンピック・パラリンピックに合わせて予定をつくっていたのではないかと思います。でも、コロナはそれを全部ご破算にしたわけです。

樋口さんは、「認知症になってから、計算としての引き算だけではなく、時間の引き算にも非常に苦労するようになった」とおっしゃっていました。三日後に仕事の締め切りがあるとしても、現在の感覚がいまいであるのに加え、日々の体調変化が大きいため、単純に全体の三分の一の量を今日やればよいということにはならないのだそうです。私たちの社会では、時間は均一であるという前提の下、時間を引き算しながら生活するということが行われてきましたが、毎日の時間が均一で

はないというときには、時間の引き算はできません。いや、病気でなくたって、実は生きている限り時間は均一ではないはず。それを、私たちは無理やり均一の時間、時計やカレンダーの時間に押し込めてきたのかもしれない。

一方、植物が持っているのは、「足し算の時間」です。それは、太陽の動きに合わせて日々、少しずつ足していくという純粹に生理的な時間です。コロナ禍で植物に目がいくようになったのは、引き算ができなくなり、空白の時間にほっぽり出されたことで、私たちの感覚が、植物にふっとシンクロしたのかもしれない。

私にとって、コロナ禍での一番の発見は、引き算の時間やその前提となる均一な時間というもの、人間の生理的な部分やそれぞれの体の差をすべて消したところにあったのだ、ということでした。そして、自分がいかにこうした時間感覚に染まっていたかということにも改めて気づかされたのです。

私は、この時間の問題はとても大きいと思っています。

私たちは時計によって「一個の時間」というものを強制的につくっているわけですが、本当は、本川達雄もとかわたつおさんの『ゾウの時間 ネズミの時間』にあるように、それぞれの生物種によっても生きている時間は違いますし、もっと言えば、同じ人間という種の中でも、一人ひとり、その人にとっての時間が存在する、さらには一人の人間の中でも体調の変化などに影響されて時間は毎日違ってくるわけです。人間は生物だからこそ絶えず変化していくものなのに、その変化が許されない時間を生きないと社会生活を送れないというのは、ちょっとおかしいという気がします。

少し話を広げると、引き算の時間の前提になっている均一な時間は、産業革命以降の私たちの社会の時間です。現代にも続く大量生産・大量消費の時代には、均一な製品をいかに速く大量につくるかということが求められますが、その結果、「誰がつくっても同じ」になるよう、労働内容が画一化され、私たち人間もおき換え可能な画一化されたものとみなされるようになっていきました。そして、時給という考え方に見られるように、これだけの時間、労働したら、これだけの成果が出るはずだと、時間も均一化されていったのです。

障害者という概念は、そうした人間の画一化や時間の均一化が起こったときに生まれたものです。産業革命以前、たとえ

ば目が見えない人に対しては、「見えない」ということはその人の特徴と捉えられ、目が見えなくてもできる仕事が割り当てられていました。しかし、産業革命によって、これだけの時間、労働したら、これだけの成果が出るはずだという画一性に乗れない人を障害者だと定義するようになった。つまり、目が見えないことはもはやその人の特徴ではなく、「見えないからできない」という能力のケツジョと捉えられるようになったのです。

ちなみに、一九八〇年代頃からこうした考え方も変化し、障害の原因は個人ではなく社会にあるという見方が広がり始めました。日本で二〇一一年につくられた改正障害者基本法における障害者の定義もそれに則_{のつと}ったものになっています。しかし、この障害の「社会モデル」は必ずしも完全に一般的になっているとは言えません。

(伊藤亜紗「思い通りにいかないことに耳を澄ます」より)

問一 「私が専門とする『美学』とあるが、筆者は「美学」のどういう点に興味を持っているのか、その説明として最も

も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

17

- 1 言語化された概念に向かって分析を進めていく哲学とちがひ、言葉に頼らずに芸術を考察していく点。
- 2 芸術作品を見た時に感じる「曰く言い難い感覚」について、あえて言葉を使って考察を深めていく点。
- 3 人間一人一人の体の条件の差を「体一般」として抽象化し、すべての人に共通の美の研究ができる点。
- 4 体の多様性を踏まえた研究によって世界の別の形や姿を発見し、実生活に役立つ技術につながるという点。
- 5 データにすると平均化されてしまう事象についても、一つ一つの個性を踏まえてみていくことができる点。
- 6 「すべてを言語化することはできない」とあきらめず、言語化された概念に向かって分析を進めていく点。

問二 「シヨウゲキ」「アイゾウ」「バイヨウ」「カイコウ」「アワてて」の漢字と、同じ漢字を含むものを、次の中から一つ選

べ。
18
22

イ 1 すでに御シヨウチの通り 2 車のコシヨウ 3 代金のベンシヨウ

4 シヨウソウに駆られる 5 シヨウガイ事件 6 労使間のセツシヨウ

ウ 1 ゾウエン業者 2 財産のゾウヨ 3 貯金がバイゾウする

4 家族のシヨウゾウ 5 ゾウオの念 6 食料をチヨゾウする

エ 1 バイリツが高まる 2 損害のバイシヨウ 3 虫が感染のバイカイとなる

4 花のサイバイ 5 土地のバイキヤク 6 コウバイ欲を刺激する

オ 1 話にカイニユウする 2 土地のキヨウカイ 3 コウカイ先に立たず

4 カイタク時代 5 カイコ的な映画 6 カイキン賞をもらう

キ 1 ビコウの膨らみ 2 金融キヨウコウ 3 コウミヨウな手口

4 コウハイした遺跡 5 契約のコウシン 6 コウソクを解かれる

問三 「警戒」^Aに最も近い意味の語として、適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
23

1 油断 2 怠慢 3 心の隙 4 緊張 5 用心 6 懷疑

問四 「見透かされている」^Bの「透」を用いた語として、正しくないものを次の中から一つ選べ。
24

1 透写 2 透明 3 浸透 4 透徹 5 透視 6 透達

問五 「覆される」^Cの読みとして、適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
25

1 くつがえ 2 だま 3 かく 4 ふく 5 ゆるが 6 さと

問六

「^D陥ってしまい」の「^D陥」を用いた語として、**正しくないもの**を次の中から一つ選べ。

26

- 1 欠陥
- 2 陥落
- 3 陥没
- 4 陥入
- 5 失陥
- 6 疾陥

問七

「^E彼らは皆」の「^E皆」を用いた四文字熟語として、**適当と思われるもの**を次の中から一つ選べ。

27

- 1 起死皆生
- 2 免許皆伝
- 3 朝令暮皆
- 4 皆力乱神
- 5 皆刀乱麻
- 6 文明皆化

問八

「^カみんな障害者になったね」という発言が意味する内容の説明として、**最も適当と思われるもの**を次の中から一つ選べ。

28

- 1 コロナのパンデミック状況の中で障害者も健常者もいろいろなことが自分の思い通りにできない日々を送っており、みんな自分が信じていたものが根本から覆されるような感覚に陥っているということ。
- 2 コロナのパンデミック状況の中で障害者も健常者もいろいろなことが自分の思い通りにできない日々を送っているが、みんなピリピリせず動揺せずにとっしりと構えることができるようになったということ。
- 3 コロナのパンデミック状況の中で障害者も健常者もいろいろなことが自分の思い通りにできない日々を送っており、みんな環境が原因で自分の自由が奪われるという経験をしたということ。
- 4 コロナのパンデミック状況の中で障害者も健常者もいろいろなことが自分の思い通りにできない日々を送っており、みんな自分の体の中に無限の可能性を秘めた自然を持っていることを理解したということ。
- 5 コロナのパンデミック状況の中で障害者も健常者もいろいろなことが自分の思い通りにできない日々を送っており、みんな人との付き合いの経験値がとて高くなったということ。
- 6 コロナのパンデミック状況の中で障害者も健常者もいろいろなことが自分の思い通りにできない日々を送っており、みんな自分が周囲の人々をコントロールしていたのだと気づいたということ。

問九

「コロナ禍」の「禍」を用いた慣用句として、**正しくないもの**を次の中から一つ選べ。

29

- 1 禍福は糾える縄の如し
- 2 口は禍の門
- 3 舌は禍の根
- 4 吉凶禍福
- 5 禍福無門
- 6 禍人薄命

問十

「偶然」の反対を意味する語として、**適当と思われるもの**を次の中から一つ選べ。

30

- 1 蓋然
- 2 必然
- 3 当然
- 4 自然
- 5 漠然
- 6 天然

問十一

「足し算の時間と引き算の時間」に関する説明として、**最も適当と思われるもの**を次の中から一つ選べ。

31

- 1 足し算の時間とは植物が太陽の動きに合わせて日々少しずつ成長するときのような美しい時間であり、引き算の時間とはゴールから逆算して今しなければならぬことをするような美しくない時間である。
- 2 足し算の時間とは産業革命以前の生産性の低い時間であり、引き算の時間とは現在よりも何時間後、何日後に意識を向け、予定をスケジューリングしていくような生産性の高い時間である。
- 3 足し算の時間とは太陽の動きに合わせて生活するような均一性をもつ時間であり、引き算の時間とは産業社会に合わせて個人が生活するという均一性をもつ時間である。
- 4 足し算の時間とは人間を画一化しない時間のことであり、引き算の時間とは個人の特徴を均一化し人間をおき換え可能な存在とみなすような時間である。
- 5 足し算の時間とは太陽の動きに合わせて日々少しずつ成長していくような植物的な時間であり、引き算の時間とは毎日の生産や消費とつながる動物的な時間である。
- 6 足し算の時間とは画一性に乗れないことを能力のなさともみなすような時間であり、引き算の時間とは画一性に乗れない人を障害者だともみなす時間である。

問十二 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

32

32

の欄に、二か所マークすること

1 コロナ禍によって、均一な時間というものが人間の生理的な部分や各自の身体的な差異を排除して成り立っていたことに筆者は気づいた。

2 障害者という概念は、個人の能力の有無によって決められるべきではなく、その時代の社会で基準になっている社会モデルとの差異によって決められるべきである。

3 私たちは、時間の引き算を日常生活の中でごく当たり前のこととして行っているが、コロナ禍で予定が真っ白になってしまったときぐらいいしか時間の足し算ができない。

4 認知症患者は、現在の感覚のあいまいさや日々の体調変化の大きさのため、健常者と違って毎日の時間を均一に感じることができない。

5 筆者は、自身の吃音ゆえ常に言葉への違和感を覚えており、容易には言葉で表すことのできない身体感覚を研究する美学に興味を持つようになった。

6 障害者という概念は、産業革命以後の人間の画一化や時間の均一化によって生まれたが、コロナ禍によって、障害の原因は個人ではなく社会にあるという見方が広がり始めた。

次の〔三〕の問題はクリエイティブイノベーションシヨンを学科を受験する者、またはクリエイティブイノベーションシヨン学科と映像学科を併願する者のみ解答すること。

〔三〕 次の文章は『源氏物語』手習てならひのまき巻の一節である。男君おやしきの邸に住まう女君のもとに男君と親しい宮が通うようになる。男君と宮の間で板挟みになった女君は邸から失踪し、行き倒れたところを尼君たち一行に救われたのち、素姓を隠して尼君のもとで暮らしている。これを読んで、後の問に答えよ。

九月になりて、この尼君(注1)、初瀬(注2)に詣よづ。年ごろいと心細き身に、恋しき人の上も思ひやまれざりしを、かくあらぬ人とも(注3)慰めを得たれば、観音(注4)の御験しるしうれしとて、返申かへりまうしだちて詣でたまふなりけり。「いざたまへ。(注4)人やは知らむとす(注5)。同じ仏なれど、さやうの所に行ひたるなむ験ありてよき例多かる」と言ひて、そのかしたつれど、昔、母君、乳母めのとなどの、かやうに言ひ知らせつ、たびたび詣でさせしを、かひなきにこそあめれ、命さへ心かなはず、たぐひなきいみじき目を見るはといと心憂き中にも、知らぬ人に具して、さる道の歩きをしたらんよとそら恐ろしくおぼゆ。心ごはきさまに言ひもなさで、「心地のいとあしうのみはべれば、さやうならん道のほどにもいかなど、つつましうなむ」とのたまふ。もの怖おぢは、さもしたまふべき人ぞかしと思ひて、しひてもいざなはず。

はかなくて世(注7)にふる川(注7)のうき瀬にはたづねもゆかじ二本の杉

と手習にまじりたるを、尼君見つけて、「二本は、(注8)またもあひきこえんと思ひたまふ人あるべし」と戯たはぶれ言を言ひあてたるに、胸むねつぶれて面赤おもてめたまへるも、いと愛敬ぎやうづきうつくしげなり。

ふる川(注8)の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る

ことなることなき答こたへを口とく言ふ。忍びてといへど、皆人慕ひつつ、ここには人少なにておはせんを心苦しがりて、心ばせある少将の尼、左衛門さゑもんとてあるおとなしき人、童わらはばかりぞとどめたりける。

(注1) 初瀬 — 長谷寺のこと。

(注2) いと心細き身 — 尼君は夫と娘に先立たれている。直後の「恋しき人」は娘のこと。

(注3) あらぬ —— 関係ない、別の。

(注4) 人や知らむとする —— 誰にも知られるものですか。尼君は女君が素姓を隠していることに配慮している。

(注5) さやうの所 —— 霊験あらたかな霊場。

(注6) 命さへ心になはず —— 女君は入水しようと思って邸を出たが、果たせなかった。

(注7) 世にふる川 —— 「ふる」は「経る／古（川）」の掛詞。かけことば。長谷寺近くには古川という川があり、「二本の杉」と

呼ばれる寄り添う二本の杉がある。この木に願を掛けると恋しい人と再会できるとされていた。

(注8) もとだち —— 草木の根元や立ちようのこと。ここでは人の素姓や生い立ちといった意。

問一

空欄

X

に補うのに最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

33

1 おぼえたまはぬ

2 おぼしたてまつらぬ

3 おぼしたまひぬ

4 おぼえたまひぬる

5 おぼしはべりぬる

問二

傍線部 a～e の文法的な説明として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

34

1 a は、動詞「思ひ病む」の未然形と自発の助動詞「る」の未然形である。

2 b は、伝聞の助動詞「なり」の連用形と過去の助動詞「けり」の終止形である。

3 c は、尊敬の敬語動詞「詣づ」の未然形と尊敬の助動詞「させ」の連用形である。

4 d は、強意の助動詞「ぬ」の未然形と推量の助動詞「む」の終止形である。

5 e は、謙譲の補助動詞「きこゆ」の未然形と意志の助動詞「む」の終止形である。

問三

「胸つぶれて面赤めたまへる」についての説明として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

35

- 1 女君が詠み出した「二本の杉」について、それはもう一度会いたいと願っている死んだ恋人のことだろうと尼君は理解し、娘を亡くした経験から女君に同情して涙を流したということ。
- 2 女君の歌にある「二本の杉」について、それは女君が交際していた二人の男のことだろうと尼君はあて推量をし、女君の意外なはしたなさに呆（あき）れてしまったということ。
- 3 女君の歌の「二本の杉」について、それはあなたが再会したいと思っている恋人のことだろうと尼君に言い当てられ、女君は驚きもし、恥ずかしくもなったということ。
- 4 男君は自分を探しはしないだろうという内容の歌を詠んだところ、尼君にその内容を正確に推察され、女君は隠している素姓が知られてしまうのではないかと動揺したということ。
- 5 自分から男君に会いにはいくまいという内容の歌を詠んだところ、尼君に二人の男と交際していたのかとがめられ、女君は誤解されたことに悲しくなったということ。

問四

和歌「ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る」についての説明として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

36

- 1 「ふる川の杉」は男君のことで、「過ぎにし人」も男君のこと。女君の慕う相手がどんな人かは知らないが、その人のことはもう忘れましようという趣旨の歌である。
- 2 「ふる川の杉」は女君のことで、「過ぎにし人」は母君のこと。女君の素姓はわからないが、今となつては私を母親に見立てて暮らしてくださいという趣旨の歌である。
- 3 「ふる川の杉」は女君のことで、「過ぎにし人」は男君のこと。女君の恋人の素姓は知らないが、その恋人に匹敵する相手と結婚してはどうですかという趣旨の歌である。
- 4 「ふる川の杉」は女君のことで、「過ぎにし人」は尼君の娘のこと。女君の生い立ちはわからないが、自分はおなたをわが娘と重ねて見ていますという趣旨の歌である。
- 5 「ふる川の杉」は女君のことで、「過ぎにし人」も女君のこと。女君がどこのだれかは知らないが、自分の過去に囚われず自分らしく生きなさいという趣旨の歌である。

問五

「人少なにておはせんを心苦しがりて」の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

37

- 1 自分たちがわずかな人数で留守番をしなければならないことを苦痛に思い
- 2 尼君がわずかな供人と長谷寺詣でをするのが気の毒に思われて
- 3 尼君がわずかな供をつれて長谷寺詣にいらつしやるのが心苦しく思われて
- 4 女君が人の少ない留守宅に居残りなざることを気の毒に思つて
- 5 女君が召使いの少ない状態でお出かけにならないでいるのを迷惑に思つて

問六

本文の説明として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

38

- 1 尼君は女君と自分を巡り合わせた長谷寺の観音にお礼参りに行こうと考えるが、女君は観音が命を救ってくれたと聞かされても感謝する気にならない。
- 2 尼君から長谷寺詣でに誘われた女君だが、かつて母や乳母は御利益があると言って幾度も長谷寺に詣でていたが効果はなかったという記憶を思い出す。
- 3 女君は尼君の誘いを強引に断るのも角が立つだろうと体調を口実に長谷寺詣でを辞退するが、尼君は女君が外出を怖れるおそのも無理はないと理解を示す。
- 4 女君は歌を手習に紛れ込ませることで長谷寺詣でに行きたくない本当の理由を伝えるが、尼君は女君が冗談を言ったのだと理解して受け流してしまう。
- 5 歌に託して自分の過去を打ち明ける女君に対して、尼君はあなたの過去がどうあれ私はそのままのあなたを大事に思いますと心のこもった歌を返す。

国語 解答

大問一

問一	問二					問三	問四	問五
	イ	エ	オ	キ	ク			
5	4	5	6	3	5	1	3	4

問六	問七	問八	問九	問十	問十一	問十二	
1	5	6	5	2	6	1	6

大問二

問一	問二					問三	問四	問五
	イ	ウ	エ	オ	キ			
2	6	5	4	4	2	5	6	1

問六	問七	問八	問九	問十	問十一	問十二	
6	2	3	6	2	4	1	5

大問三

問一	問二	問三	問四	問五	問六
1	5	3	4	4	3